

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

No 20
2024.7



37.7°C
62.3%RH

ホームページはこちらから → <https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>



白 分一人の視点ではなく

本号では、筑波大学附属久里浜特別支援学校校長の齋藤豊先生にお話を伺います。

先生のこれまでのご経歴を教えてください。

大学では理科教育を学び、コンピューターを活用した、理科の実験方法に関する研究をしていました。卒業後、附属坂戸高校で1年間、附属桐が丘特別支援学校で24年間勤務した後、附属久里浜特別支援学校の副校長を3年間勤めました。そして、今年度から校長になりました。

附属桐が丘特別支援学校で初めて担任したのは、重度重複障害で最重度のクラスでした。大学では理科教育を学び、障害のある子供たちの関わりはほとんどなかったため、首などが座っていない子供たちや言葉でのやり取りができない子供たちに対して、どのように授業をするのかと当時は思っていました。しかし、その重度の子供たちへの授業を試行錯誤しているうちに、肢体不自由の教育に全力で取り組もうと考えるようになり、現在に至ります。

理科教員として教えていた間が一番長かったのですが、附属桐が丘特別支援学校では、最重度の子供たちから大学受験を目指す子供たちまで幅広い実態の子供たちの指導を行ってきました。また、コロナ禍で学校が開けない状況のときは、「これは何かをしないといけない」との思いで、オンライン授業

を行える環境を整えたり、全国の様々な地域の学校をオンラインで繋ぐ、「遠隔合同授業マッチングサイト」を立ち上げたりしました。

教育現場で大切にされてきたことは何ですか。

肢体不自由のお子さんとはとても素直で、一生懸命に授業や活動に取り組んでくれます。ただ、理科には、子供たちにとって、理解しにくい単元や内容などが含まれていることが多々あります。そのような内容を扱うときに、いつも思ってきたことは、「子供たちが一生懸命に取り組んでいるのに分からないのであれば、それは、教える側の問題である」ということです。そして、「何をどこまで扱えば子供たちは出来るようになるのか」、「どのように提示したら分かってもらえるのか、分かりやすいのか」ということを、ずっと考えていた気がします。また、子供たち自身が「楽しい」「もっとやりたい」と思えるように、「どう興味をもたせるか」ということを大切にしてきました。

また、授業を行う上では、「子供たちが何をどんな風に捉えているか」ということ、例えば、障害特性や家庭環境などから、単元で扱う事象について、

いろいろな人に意見を聞くことが大事



未経験なのか、経験していても残っていないのかなどについて考慮することも大切であると思っています。

教師になって良かったと感じた出来事についてお聞かせください。

授業の中で「子どもたちが分かった」と感じる瞬間、「掴んでくれたのかな」と思える瞬間が、やはり、とても嬉しいです。「今日はうまくできたな」と思える授業は、そんなにあるわけではないですが、たまに、すごく手応えを感じる時もある、そのようなときは、とても嬉しいです。

手応えとは、どういうものでしょうか？

「これどう思う？」と聞いて、子供たちからの言葉が、こちらの予想を上回ってくる時や、「これはどうなのだろう？」と疑問をもっていたり、学習したことについて子供たち自身が考えたりするときに手応えを感じます。単に覚えるのではなく内容を理解して別の形で表現できているとき、明らかに理解しているのだと、とても嬉しく思います。

もう一つ、印象に残っていることは、普通校から手術を受けるため、隣接する病院に入院し、短期間、施設併設学級の中学部に在籍していた子供が、数年後、桐が丘の高等部を受験しにきたことがありました。その時、その子供に「桐が丘で学んだ後はど

んな将来を考えているの？」と聞いたら、「理科の先生になりたいです。」と言ってきて。それはとても嬉しかったです。

先生のされた授業がしっかりと思い出として残り、受験のきっかけとなったのでしょうか。

半年間程度、一对一の授業だったと思います。とても熱心に取り組んでくれました。その経験がきっかけになっていたのだとしたら、嬉しいです。

特別支援教育に携わる先生方へ一言お願いします。

自分は、はじめから特別支援教育を志したのではありませんでしたが、子どもたちに関わりたい、教えたいという思いから教師となりました。特別支援教育でも通常学校の教育でも、子供たちに接するときの姿勢は全く変わりがないと考えています。

ただし、障害のある子供たちを捉えていく時は、さらに多角的な視点が必要になります。それぞれの障害に起因する困難や障害特性について知ること、子供の背景をより理解しやすくなります。そして、つまずきの要因や次の手立てなどについて考えることができるようになっていきます。ですから、若い先生方には、是非、そうしたスキルを身に付けて欲しいと思っています。

それと、もう一つ。教育には、これが正解というものはないと思っています。絶対にこれがいいとか、絶対こうしないといけないということはなく、いろいろな状況や要素を検証しながら取り組むことが大切です。正解がないので、常に「これでいいのだろうか」と悩むことになり、不安はあると思いますが、それでいいのだと思います。そしてそのような時には、いろいろな人と話をすることが大事です。自分一人の視点や、自分が信じているものだけではなく、いろいろな人から意見を聞くことが大事だと思います。

（聞き手：連携推進グループ 稲本 純子）



齋藤先生（校長室にて）



シーカヤックの体験

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取組がたくさんあります。

見えない生徒と聴こえない生徒をつなぐ ～附属視覚と附属聴覚の寄宿舍交流活動～

附属視覚特別支援学校の飯島美帆先生にお話を伺いました。飯島先生は学校間交流で附属聴覚特別支援学校で勤務されたご経験をお持ちです。早くから両校寄宿舍生徒の交流活動に尽力されてきました。

視覚障害に関わるきっかけは何ですか。

子どもの頃、テレビで目にした盲導犬に興味を持ち、自ら盲導犬協会へ出向くようになりました。きっかけは犬でしたが、盲導犬啓発活動（高校時代～現在）や視覚障害者との関わりが盲界への第一歩だったと思います。大学は福祉科へ進み、ユニバーサルキャンプ（一般人と様々な特性の方をつなげる）など野外教育活動に取り組み、今も継続して携わっています。

先生が寄宿舍で携わってこられた実践をご紹介ください。

1つ目は、「在校生（高校生・専攻科生）対象の『スキンケア・メイク・髪型・ヘアケア講習会』です。寄宿舍指導員になって初めて企画した講座で20年以上になります。きっかけは、盲導犬協会と知り合った視覚障害の女性に「盲学校に勤めるなら、見えなくてもメイクができる方法を考えてくれない？」と言われたことでした。当時は、「視覚障害者にメイクなんて！」

といった時代でした。メイクするならスキンケアも、髪型も、ヘアケアも…と増えてきて、生徒が卒業するまでに各々1回は受講できるように実施しています。

2つ目は『視覚に障害のある方のための講習会（卒後支援講習会）』です。平成19（2007）年から始めて今年で18回目となります。夏休み中に実施し、在学時に教えてあげられなかったこと、マスターできなかった技術を、卒業後にフォローするための講習会です。箸の使い方や魚の食べ方など寄宿舍指導員が研究しているテーマや、外部講師や企業にご協力いただいて実施する専門的な講座を実施しています。

3つ目は『附属視覚・附属聴覚寄宿舍交流会』です。令和2（2020）年2月から年1回実施し、今年で5回目となります。

附属視覚と附属聴覚の寄宿舍交流会を始めたきっかけは何ですか。

今から10数年前、寄宿舍で盲聾生徒を受け入れたことがきっかけで手話をマスターしました。人事交流で附属聴覚へ赴任することとなり、2年目はコロナ禍と重なって行事ができなくなってしまいました。そんな時、附属聴覚の生徒たちが「盲学校ってどんなところ？」「見えないのに授業ってどうやってやるの？」と大変興味をもってくれたので、「オンラインで盲と聾の交流をしよう」ということになりました。

見えない生徒と聴こえない生徒の交流は難しそうですが、どのように行ったのでしょうか。

オンラインでの盲と聾の交流の前例がまったくなく、どうやって意思疎通をするのか不安はありましたが、ユニバーサルキャンプで培った経験から様々なヒントを得られました。そして人事交流で附属聴覚から附



「ありがとう」の手話

属視覚へ赴任した加藤真弓先生と一緒に企画し実施につなげました。第1回から第3回までの実践については本校の令和4年度研究協議会で報告し、紀要にも掲載しています。（「聾学校とのオンライン交流会を通してーコロナ禍における新たな行事の形を探るー」（筑波大学附属視覚特別支援学校研究紀要第55巻令和5年7月）。以下概要をお示しします。

○交流行事の目的

・サポートされる側ではない立場での参加・経験を積む。

・自分の障害について相手に上手く伝える。相手の障害を理解する。

・どうしたらコミュニケーションが取れるかを考え、情報保障の大切さを知る。

自力でのコミュニケーションが難しければ、手話通訳を使ったり、アプリや様々な機能を使いこなしたりするコミュニケーション方法も考える。

○情報保障（自動字幕機能以外）

・手話通訳：附属視覚生徒（以下「視覚生」）の音声（発言）を手話に変えて附属聴覚生徒（以下「聴覚生」）に伝える。

・読み取り通訳：聴覚生の手話（発言）を音声に変えて視覚生に伝える。

・状況説明：視覚生に聴覚寄宿舍生の様子を音声で伝える。

・パソコン操作：マイクのオンオフや画面共有のピン止め。

○交流会のルール（改善を重ねた3回目のもの）

①全体では発言する前に手を挙げてから自分の名前を言う。

②相手に自分の発言の終了が分かるよう「終わり」などというようにする。

③相手に内容が理解できたことを示すために、拍手やうなずくなどリアクションを積極的に返す。

④もし内容が理解できなかった場合は遠慮なく積極的に聞き返す。

【視覚生が心がけること】

ゆっくりはっきり話す。口や表情が相手に見えるよう意識して、顔を上げて話す。聴覚生がチャットを読むのにタイムラグがあるため少し待つ。

【聴覚生が心がけること】

視覚生は音がしないと分からないので、反応には何らかの音を出す。

大変素晴らしい取り組みですね。

1回目の交流は指導員主体で行い、2回目以降は生徒が主体となって行っています。昨年度は聴覚生が附属視覚へ来校し、今年度は視覚生が附属聴覚へ行く対面の交流会となりました。生徒たちは交流会を通して互いの障害について考える機会となり、配慮する側となって考えることにより、円滑にコミュニケーションを取れるようになってきました。

寄宿舍の指導で大切にされてきたことを教えてください。

生活の場なので「楽しく」を第一に、そして「楽しいことの前にしなければいけないのは何か？」と、一緒に優先順位を考えるようにしています。また、卒業後に困らないよう、必要なこと・できたらいいことの指導のほか、できないことをどうやって人に伝えるか（コミュニケーション力）、できないことを別の方法で解決するにはどうしたらいいかという指導も大切にしています。

卒業生が「あの時、あの言葉は、先のことまで考えて言ってくれていたのですね」と言ってくれたときは、とてもうれしかったです。友として会える関係の卒業生もいて、「先生」ではない微妙な立場の「寄宿舍指導員」を気に入っています。

（聞き手：連携推進グループ 中村 里津子）



附属視覚特別支援学校
寄宿舍指導員 飯島美帆 先生

令和6年度 現職教員研修（指導力向上研修コース）

6月10日（月）～7月10日（水）の期間に、高村一也先生（青森県立八戸第一養護学校）をお迎えし、現職教員研修（指導力向上コース）を実施しました。研修では筑波大学東京キャンパスでの講義の受講や、附属桐が丘特別支援学校（肢体不自由）での実践実習、附属学校参観等を通じて、充実した1か月の研修生活を過ごされました。

高村先生の研修テーマは、「重度重複障害児との適切な意思疎通方法の追究」で、実践実習では、附属桐が丘の教員と共同で、重複障害の生徒に対する教材開発に熱心に取り組みました。生徒の実態を細やかに捉えた上で、視線入力で操作する教材を作成し、授業での実践と協議を通じて、成果と考察、今後の課題を丁寧にまとめられました。成果報告会では、「1か月という短期間の中で大きな収穫を得られた。これからも、学んだことを勤務校の子供たちに還元したり、学校全体に共有したりすることを心がけながら、さらなる専門性向上のために、自分自身も学ぶ姿勢をもち続けていきたい。」と発表されました。

勤務校での今後のご活躍を心より期待しております。



修了式後の記念撮影



成果発表会の様子



授業実習の様子



桐が丘の教員と実習の振り返り

筑波大学附属特別支援学校5校の会議 （5 附属連絡会議）について

附属特別支援学校5校では、年に7回、各校の窓口の教員が集まり、学習会や情報交換会等を通じて、協働し得られた成果を全国へ発信する取組を行っています。令和2年度以降はオンラインで実施をしてきましたが、6月末に対面形式で実施することができました。

会議は附属桐が丘特別支援学校（以下、「附属桐が丘」とする。）で実施しました。会議では、肢体不自由を有する生徒を対象とした事例検討会を行いました。参加者は附属桐が丘で実施されているケース会の手法に倣って、2グループに分かれて、事例の生徒について実態把握の演習を行いました。

最初に、附属桐が丘での「個別の指導計画」に基づく授業づくりとケース会の手順、対象生徒について説明を受けた後、参加者は動画を参考にしながら、気付いたことを付箋に記入し、コーディネーターや同じグループの参加者と意見を交わしながら、模造紙の上に出し合いました。多角的な視点から活発に意見交換がなされて、各グループとも時間ぎりぎりまで検討が行われました。

最後に、コーディネーターが各グループでの意見を発表し、全体共有を図りました。4年ぶりとなる対面実施は、大変有意義な時間となりました。



生徒の動画を見た後、「あれ?」「おや?」と感じたことを付箋に書き出し、模造紙の上に出し合います。



現象から考えられる背景要因について、参加者同士で考えました。

オンデマンド研修コース（受講料無料） 登録校募集について



全国の先生方を対象として、筑波大学附属特別支援学校5校の指導や支援のポイント等をまとめた研修動画を、オンデマンドで無料配信することになりました。現行の実践実習型の研修には時間的もしくは予算的に派遣がなかなか難しいという教育現場の実情をふまえて、利便性かつ実用性の高いオンデマンド配信型のコンテンツの提供をいたします。各校での教員研修に、ぜひお役立てください。たくさんのご登録をお待ちしています。

登録申し込み期間

令和6年7月8日（月）～12月27日（金）

配信期間

令和6年10月1日（火）～令和7年2月7日（金）



教材・指導法データベースについて

筑波大学特別支援教育教材・指導法データベースでは、附属特別支援学校5校の先生方が普段授業で活用している教材・指導法をweb上で発信しています。2024年7月の段階で約620教材を掲載し、英語版についても76を超える国・地域からアクセスをいただいています。

データベースでは「どのような子どもに」「どのような指導で」使用しているのか、指導の意図や期待される効果等を紹介しています。中には、実際の指導場面の様子を画像や動画で紹介しているものもあります。

「障害種別」での検索、国語・音楽等の「各教科別」の検索、特別活動等の「教科以外の場面別」検索はもちろんのこと、フリーワードでの検索も可能です。そのため、どのような指導がしたいのか・子どもがこのような難しさを示している等、複数の視点から教材を探すことができます。特別支援学校だけではなく、小・中学校等にも活用できる教材も多く掲載されています。皆様の授業に、ぜひご活用ください。

URL: <http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/>

令和6年度 共催セミナーについて



米田宏樹氏



野口晃菜氏



藤本恵美氏

今年度の共催セミナーは、テーマを「インクルーシブ教育システムの構築を目指して～今、私たちにできること～」としました。子供たちが共に学ぶことができる環境を整備し、個別の教育的ニーズに適切に応える指導を提供する、多様で柔軟な仕組みづくりと工夫について考える機会としていただけたらと考えます。詳細は以下の通りです。オンデマンド開催ですので、場所や時間を問わずに参加することができます。皆様のお申し込みをお待ちしております。

○開催日時 10月1日（火）～10月3日（木）（申し込み期間8月1日（木）～10月24日（木））

○開催方法 オンデマンド

○講演 講演1 「通常学級におけるインクルーシブ教育の推進に向けて」
野口晃菜氏（一般社団法人UNIVA 理事）
講演2 「戸田市がめざすインクルーシブ教育システムの実践（仮）」
藤本恵美氏（戸田市教育委員会 教育政策室 主事兼指導主事）

パネルディスカッション

米田宏樹氏（筑波大学人間系教授） 野口晃菜氏 藤本恵美氏（司会：高津梓）



editorial Postscript

編 集 後 記

大輪の向日葵が青空のもとで元気な笑顔を見せる季節となりました。皆様のお手元に「SNE-T」20号をお届けできますこと、連携推進グループ員一同、大変嬉しく思っております。

本号も、巻頭インタビューをはじめ、実践報告やグループ事業の案内等を掲載しております。お時間のある折にご覧いただければありがたいです。

当グループでは、毎年、現職教員研修事業を行っております。当グループでの研修は、筑波大学附属特別支援学校での実践実習を通じて、ご自身が希望されるテーマについて深く追究する実践重視型であることが大きな特色です。

本号でも研修の様子をご紹介しますが、研修期間は1か月からお受け入れしております。ご関心のある先生は、ぜひ当グループのホームページをご覧ください。研修の実施要項ならびに研修の紹介動画を掲載しております。

本年度、グループの構成員は下記の5名となります。各校から派遣されている5名が力を合わせて、様々な事業に取り組み、発信していく予定です。事業を通じて、全国の皆様にお目にかかる機会をととても楽しみにしております。本年度も、どうぞよろしく願いたします。

竹田 恵



附属視覚
中村 里津子



附属聴覚
橋本 時浩



附属大塚 (知的障害)
高津 梓



附属桐が丘 (肢体不自由)
竹田 恵



附属久里浜 (知的・自閉症)
稲本 純子



表紙「37.7℃・62.3%RH」筑波大学附属学校教育局

SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット20号 (通巻 第68) 2024年7月18日発行
発行 / 編集 : 筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

電話 : 03-3942-6923・6937 FAX : 03-3942-6938

e-mail : snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp

<https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2024 筑波大学特別支援教育連携推進グループ (本誌記事の無断転載を禁じます)